

イニシへとムカシの違い

——古今集を中心とする考察——

吉 野 政 治

1 三種類の時間

渡辺実「所と時の指定に関わる語の幾つか——意味論的に——」(『国語学』一八一集、一九九五、六)は、時間の把握の仕方に三種あると推定し、さらにその三種の時間把握は、話者が時間の流れを自分から離れた流れと見るか、自分に関わる流れと見るか、の違いでもあるらしいとした。すなわち、時間の流れを自分から離れた流れと見るものが第一の時間把握である。第二と第三の時間把握は、時間の流れを自分に関わる流れと見るものであるが、その流れと共に話者が移動して、その歩みの経験として時間を捉えるのが第二の時間把握であり、移動体は時間であって話者は動かず、出来事が目の前に次々と立ち現れ、

過ぎ去っていくと捉えるのが第三の時間把握である。前拙稿「古代時間語彙の分類」(『国語語彙史の研究(十五集)』二〇〇六、三)では、この説を踏まえつつも、話者が時間の流れを自分から離れた流れと見るか、自分に関わる流れと見るかという点について、それらは同じ時間に対する把握の仕方の違いと考えるより、異なる種類の時間が意識されていると考えた方がよいのではないかとし、次のような時間の分類を試みた。すなわち、一つは、客体世界の中を流れる時間であり、二つは、話者自身の存在がその流れの中に居るところの時間である(この二つめの時間に、渡辺氏の第二と第三の把握の仕方があることになる)。前稿では前者を「観察の時間」と呼び、後者を「経験の時間」と呼んだ。さらに前稿ではこの二つの時間の他に、自

己の内部世界における時間が認められるとし、それを「思索の時間」と呼んだ。「観察の時間」と「経験の時間」は一定の速度で流れるが、この「思索の時間」の流れは不定であり、恋人との時間は早く流れ、退屈な時間はゆっくり流れたり、あるいはまったく停止したりし、遠い昔のことが昨日のこのように思われたり、目の前に起きていることを過去に起きたことのように感じるなど、過去・現在・未来の秩序を無視するといった特徴をもつ。

この三つの時間は、次の三つの世界像と関係するものと考えられる。三つの世界像とは、一つに「客体世界のエレメント間の関係性によって構成される世界像、いわゆる客体世界の世界像」であり、二つに「そこに自己との関係性という視点を導入することによって見えてくる世界像」であり、三つに「客体世界を離れた自己の内部世界に見出される世界像」である（立花隆『脳を鍛える——東大講義「人間の現在——」新潮文庫、48—50頁）。この三つの世界像は、発達心理学において次のように説明されるものと同じであろう。岡本夏木『幼児期』（岩波新書二〇〇五、五、8頁）に言う。

発達心理学から見た時、一人の人間にとっての世界は、大

きく言って三つの世界が重層化したものです。最基層は、「自己」と現実的に交渉しあう「生活世界」、そしてその上に、直接現実的に接しはしないが、人々が伝えてくる情報を手がかりに形成する「情報的知識世界」、さらにその上に、外界の事物との直接的対応性を離れて自分の中で成立する「心情の世界」が重ねられます。

右の岡本氏の説明を参考に三つの時間を説明し直せば次のようになる。すなわち、「自己」と現実的に交渉しあう『生活世界』に流れている時間として考えられているものが「経験の時間」であり、「直接現実的には接しないが、人々が伝えてくる情報を手がかりに形成する『情報的知識世界』」に流れている時間として考えられているものが「観察の時間」であり、「外界の事物との直接的対応性を離れて自分の中で成立する『心情の世界』」に存在する時間として考えられているものが「思索の時間」である。

以上の三つの時間は、例えば次のようなものである。ある人が小説を読んでいる場合、その小説の中を流れている時間（正確にはその小説の中の情報から読み取れる時間の流れ）が「観察の時間」であり、その小説を読んですごしている時間が「経

験の時間」であり、小説の内容とは無関係に頭に浮かぶ様々なことがらを意識の中の一定の位置に位置づける時間が「思索の時間」である。

この三つの時間は、三つの世界が一人の人間の中で重層化したものであるように、一人の人間の中で重層化しており、話者は必要に応じて自在に操ることができる。(一言(ディスクール)の言表行為には、あらゆる形のあらゆる時制が入る)E・ヴァンヴェスト『一般言語学の諸問題』岸本通夫監訳)。たとえば過去の物語をその現場に身を置くように語る「歴史的現在」と呼ばれるものは、「観察の時間」の中に「経験の時間」における現在を挿入させたものといえることができる。また、「自己の内部世界に見出される世界像」においても「外部世界は内部世界に反映する限りにおいて」反映されることがあるように(立花氏)、「思索の時間」もまた「経験の時間」が反映するものと思われる。ただし、本稿で考えるイニシヘやムカシといった単語それ自体の意味の違いを考えるような場合には、その観点は必要ではないであろう。

2 イニシヘとムカシの違い

—— 私案とこれまでの説 ——

前稿では、イニシヘは「経験の時間」における過去であり、ムカシは「思索の時間」における過去であろう、という見通しを述べた。それは次のように考えたからである。

「経験の時間」の流れは、渡辺氏が指摘するように二つに感じられる。一つは移動体を話者自身とした場合で、そのとき時間は過去から未来へと流れ、もう一つは移動体を時間とした場合で、そのとき時間は未来から過去へ流れる。コシカタ・キンカタ(来し方) またユクスエ(行く末)・ユクサキ(行く先)などが前者の場合における過去と未来を表すものであることは疑えない。これに対して、イニシヘは後者の場合における過去を表すものと考えられる。というのも、イニシヘは「去にし刃」であり、「去ぬ」の基本義は、話者の居る地点にあったものが、そこから遠ざかり、姿を消す、ということであり、話者の居る位置は動かないものだからである。そうした基本義を持つ「去ぬ」が時間に用いられた場合もまた、話者は現在の時点から動かず、時間や出来事が話者の現在から遠ざかっていくも

のと捉えられているものと考えられる。それは、

燃燈僧ノイニシへ九十一劫ガサキヨリ世々生々仏法ニオキ
テハヒトコトモタガヘジトチギリシコトハ…

(法華百座聞書抄オ二二八)

のように、イニシへは時間の流れの「サキ」にあるという用例
によって確かめられる。

ちなみに、この「経験の時間」における二つの時間の流れの
方向を利用したのが、次のような表現であろう。

我がごとく物思ふ人はいにしへも今行末もあらじと思ふ

(拾遺集九六五)

…その夜往にけり。いにしへゆくさきのことどもいひて…

(伊勢物語・第21段)

これらは、話者の現在を中心に過去と未来とをそれぞれの方
向に向かって展望しているものであり、その視線の方向を表すの
に、過去へ向かう時間の流れを表すイニシへと、未来へ向かう
時間の流れの彼方を表すユクスエ・ユクサキを用いたものと考
えられる。このような対にならざるをえないのは、話者は過去
から未来に向かって流れる時間の中を過去に向かって歩くこと
はできず、未来から話者の現在に向かって流れてくる時間の中

で、その流れの負の方向である未来の彼方を表す語は存在しな
いことによるものと思われる。

ムカシは「思索の時間」の過去であろうと考える根拠の一つ
に、観智院本類聚名義抄の「憶」(法中七六)・「憶昨」(仏中一
〇一)の訓にムカシとあり(「昨、往日也」正字通、「昨ムカ
シ」観智院本類聚名義抄(仏中一〇一)、神田本白氏文集天永
四(一一一三)年点の「憶在」(四ノ十三ウ七)にもムカシの
訓があることがある。「思索の時間」は、意識主体の感じてい
るイマという時間とそれとは異なる時間との区別が基本となる
と考えられるのであるが、このイマは「20世紀のイマ」「イマ
の世の中」というように、話者の意識する現在の状況と同質と
認める時間の広がりを言うものである。すなわち「かつてあり、
現在はない、イマとは異質と認識された時間」がムカシである
うと考えられる。すなわち、ムカシはイマと対峙する時であり、
ムカシのムカはムカサクル(遠く相對している)・ムカツラ
(向つ峰)のムカ(向)と同じで、「対する」いった意味である
思われる。ムカシのアクセントは上・上・上(鎮国守国神社本
類聚名義抄Ⅲ十オ3など)、ムカフのムカもまた上・上(観智
院本類聚名義抄法下四十)である。

以上が筆者の考える類義語イニシへとムカシの違いであるが、本稿はその違いを実際の用例に即して検証してみようというものである。

その前に、管見の範囲で知りえたイニシへとムカシの違いに関する説で、特に重要と考えるものを次に掲げておくことにする。これらの説の中で既に言われており、本稿でも同じように考えることは、イニシへは「去にし辺」であり、「過ぎ去ったあたり」というのが原義であると考えること、ムカシは「ムカ・シ」と分析され、ムカは「向」(「対する」の意)であり、シは方向の意が時の意に用いられたものと考えること(シは方向の意を表すことは、成務紀五年九月の「日縦」「日横」を北野本・私記丙本はヒノタタシ・ヒノヨコシと訓むことが参考になる。『時代別国語大辞典上代編』「たたさ」の項にはタタサ・ヨコサの転化かとある)。また、イニシへもムカシも現在との時間の隔たりの大小とは関係なく用いられる、ということである。

- ① 語源的に考えても「いにしへ」は過ぎ去った方であつて、近くても遠くも過去を指す意であつたと思われる。

イニシへとムカシの違い

それに対して「むかし」ははっきりした語源はわからないが、「むか・し」で「向かふ」「向かつを」などという「むか」を根とするものであろう。現在に対し、過去の時、または時期をさして、その頃というように指す語であつたと思われる。「むかし」も「いにしへ」も現在との時間の隔たりの大小とは関係なく、遠い古代を指すこともあれば、自分の経験した世界での過去を指すこともある(∴例略∴)。「むかし」は過去のいつかの頃を回想した気持ちであり、「いにしへ」はもっと広く現在から見て過去の方としてのムカシであつたと思われる。(原田芳起『国文学 解釈と鑑賞』昭和36年)

② (ムカシ) ムカ(向)とシ(方向)の複合か。回想がそこへ向かつて行く方向。すなわち、伝承や記憶の中で生きている一時点として把握した語。最も古くは、なつかしい故人や自分が実際に体験・見聞した過去のことをいい、遠い時代のこととも近い頃のこととも指す。類語イニシへ(古)は、過ぎ去り消えて行ってしまつたあたりとして遙かに遠く眺める気持ちで過去を把握

した語。奈良・平安時代にはムカシ・イニシへの区別があったが、以後次第に混同した。

(イニシへ) イニ(往)シ(回想の助動詞キの連体形)へ(方)の意味。過ぎ去って遠くへ消え入ってしまったことが確実と思われるあたり、の意。奈良・平安時代には、主として、遠くで自分が実地に知らないはるかな過去、忘れられた過去などの意に多く使われたが、鎌倉時代以後、ムカシがこの意味に広まって来て、イニシへは古語的・文語的になり、あまり使われなくなった。(『岩波古語辞典』昭和49年)

- ③ 『昔』なるものが『今』から、『今』とは異なる時期として対象化されている。…ムカシという語じしん、ムカフ(向)に由来しており、一つのかなたなる、向こう側の時期を指し示している。その点ムカシはイニシへ⇨往ニシへ(古)とは、含意するところをおのずと異にする。…「イニシへはイマにずっと続いてきている過去」である。

(西郷信綱「神話と昔話」昭和51年)

- ④ 元来はムカシは表現主体と連接する過去を表すのに対

して、イニシへは表現主体を離れた過去を表すという区別があったが、この区別は次第にあいまいになり、「いにしへのこと語りいでてうち泣きなどし給ふ」(源氏・末摘花)のように経験のうちにある過去を示すこともある。(『角川古語大辞典』昭和58年)

- ⑤ 「いにしえ」は、「往に⇨方」の意。現在と遮断された遠く久しい過去を漠然という言葉。…「むかし」は「向か時」で、現在の自分に向き合ってつながる過去を言い、……

(伊藤博『萬葉集全注卷一』昭和58年)

この他に特筆すべきものに望月郁子「イニシへ・ムカシ考」(『常葉女子短期大学紀要』昭和44年11月)がある。この論文では用例に即して最も詳しい考察がなされているが、右の②の説と結論はほぼ同じである。また、西郷信綱氏の説(説③)を受けた西條勉氏の「ムカシとは『今』とは断絶した異次元の時間帯、経験的な時間感覚を超えた大過去のことである。…(中略) …それはあとで触れるように、「今」と連続し経験的な時間意識の次元でとらえられるイニシへとは異なった時間である。」

〔古事記と王家の系譜学〕第一章「フルコトをどう考えるか」という説がある。これら西郷・西條両氏の説が本稿の考え方に最も近いが、ムカシが「はるかな過去」あるいは「大過去」だけでなく、近い過去にも用いられること、また、イニシへは過去から現在へと流れる時間の負の方向にあるのではなく、現在から過去へと流れる時間の正の方向にあると考える点において異なる。

3 本稿での調査対象

両語の違いは最も古い上代の用例から検討すべきであるが、上代の用例で万葉仮名で書かれた例は少なく、イニシへは九例、ムカシは二例しかない。用例の殆どは「昔」「古」「往古」「古昔」「従来」などの正訓字で書かれており、ムカシともイニシへとも訓み得るものが多い（観智院本類聚名義抄にも「昔」「古」ともムカシ・イニシへの訓を載せる。仏中八九・仏中六三）。したがって、平安時代以降の仮名書きの例の検討によって得られる違いを上代の仮名書き例について適用してみても、同様の結果が得られるなら、さらにその区別を正訓字の訓みに応用するしかない。

イニシへとムカシの違い

現在ではイニシへは古語化し、ムカシがイニシへの意味領域を侵していることは確かであるが、その区別が失われた時期については明確ではない。前節に掲げた説においても、両語の意味の違いをどのように考えるかに因るが、その区別は平安時代まではあった（説②）とも、あるいは既に平安時代の11世紀初頭に書かれた源氏物語にその混用が見られる（説④）とも言われる。したがって、本稿では平安時代の初期の資料である古今集（九〇五年成立）の用例について検討することにする。

以下、本稿で指摘する両語の違いは八代勅撰和歌集全体においても、原則的に適用できるようである。ただし、千載和歌集（一一八七年成立）の仮名序には「敷島の道もさかりにおこりて、言葉の泉いにしへよりも深く、言葉の林むかしよりも繁し」と、イニシへとムカシとが対になっている例が見えるように、すでに平安時代後半頃には両語の違いが見失われだしているようである。

ちなみに八代勅撰和歌集に見える両語の数は次の表のごとくである。テキストは新日本古典文学大系本を使用。拾遺集の和歌に「昔」と書かれイニシへと訓まれている例がある（「いはしろのゝ中に立てるむすびまつ心もとけず昔おもへば」八五

四・一二五六重出。底本は「冷泉家伝来の藤原定家自筆本を忠実に臨写したとされる、京都大学付属図書館蔵中院通茂本」である）が、これはイニシへの例として数えた。後撰集・拾遺集・金葉集・詞花集には序文はない。

ムカシ

和歌	15	19	17	21	3	9	27	73	184
題・左	9	8	1	9	3	1	5	8	44
仮名序	2	-	-	1	-	-	3	4	10
合計	26	27	18	31	6	10	35	85	238

イニシへ

和歌	4	5	11	17	3	4	9	12	65
題・左	-	-	-	1	-	-	2	1	1
仮名序	7	-	-	2	-	-	2	1	12
合計	11	5	11	20	3	4	11	13	69

4 古今集の用例の分析

古今集の仮名序と和歌（詞書・左注を含む。その理由は後述）では、イニシへとムカシの現れ方に相違がある。仮名序ではイニシへは七例が見られるが、ムカシは和歌の引用による二

例（「男山のむかしを思ひいでて」「春やむかしの春ならぬ」）しかない。したがって、厳密には仮名序にはムカシは見られないと言ってもよい。逆に和歌にはムカシは十五例が見られるが、イニシへは四例だけである。この違いが意味することについては後に考える。

以下、引用する歌文のイニシへ・ムカシの表記はテキストのままである（この底本は今治市河野美術館蔵『詠訓和歌集』である）。

4-1 古今集のイニシへの分析

古今集の和歌に見えるイニシへは次の四例である。

- ① いにしへにありきあらずは知らねども千年のためし君に
はじめむ (三五三)
- ② いにしへに猶立ちかへる心かな恋しきことにも忘れせ
で (七三四)
- ③ いにしへの野中の清水ぬるけれど本の心をしる人ぞくむ
(八八七)
- ④ いにしへの倭文の芋環いやしきも良きもさかりはありし
ものなり (八八八)

仮名序に見えるイニシへは次の七例である。

⑤ いにしへの世々の帝、春の花の朝、秋の月の夜ごとに、
侍らふ人々を召して、事に付けつゝ、歌をたてまつらし
めたまふ。

⑥ いにしへよりかく伝はるうちにも平城の御時よりぞ広ま
りける。

⑦ ここにいにしへの事をも歌の心をもしれる人わずかに一
人ふたりなりき。

⑧ ここにいにしへの事をも歌をもしれる人多からず。

⑨ 小野小町はいにしへの衣通姫の流なり。

⑩ いにしへのことをも忘れじ、ふりにししことをもおこし給
ふとて

⑪ いにしへをあふぎて今をこひざらめかも。

これらのイニシへは、例④を除いて、すべて語源に即して
「過ぎ去った時」と訳して理解することができるが、さらに次
に述べるような特徴が認められる。

和歌の例①の歌に関して新古典文学大系の頭注に「王朝律令
制社会は先例・典拠を重んじる。かな序・まな序もその立場で

記述する」とあるが、確かに右に掲げた仮名序におけるイニシ

へを用いた文(例⑤から⑪)もまた、すべてそのような立場で
書かれていると考えてよいようである。前述のように仮名序で
はムカシを用いることが原則的に無く、イニシへのみが用いら
れるが、これは、ムカシには過去にそうした先例・典拠を求め
る意識と合致する意義素が含まれず、イニシへにはそれが含ま
れるからではないかと思われる。過去に先例・典拠を求めると
いうのは、過去が現在と連続する時間として捉えられていると
いうことである。すなわち、イニシへは現在との連続性におい
て捉えられた過去という意味あいがあるのではないか。和歌の
例④の「いにしへの倭文」は「日本古来の織物である倭文」と
いった意味であり、イニシへは「過ぎ去った時」といった意味
から「古来」あるいは「古式」といった意味に変化しているが、
この「古来」あるいは「古式」といった意味は、イニシへが現
在との連続性において捉えられた過去であることを却てよく
示すと言える。すなわち、過去において成立したものであり、
したがって古くなつてはいるものの、現在においてもなお存在
するのが「古来」「古式」ということである。

和歌の例②③のイニシへは、そのような、過去において存在

したものが、現在もなお存在しているという文脈で用いられている。

例②「過ぎ去った恋の日々のあの昔にやはり立ち帰って行くわたくしの心よ。ひたすら恋しく逢いたいという思いについてはまったく忘れもしませんので」(新古典文学大系訳)。「恋の日々」は遠い過去のことであるが、「ひたすらに恋しく逢いたいという思い」はその頃と同じく今も存在するのである。

例③『いにしへの野中』と古歌にもよまれているその野中の清水は、今は生ぬるくなっているがやはり喉(ど)を潤すために人が汲み取るように、わたくしは決して利巧ではないけれども、もともとわたくしの本の心を知る人はきつとこのころをくみとってください」(同右)。野中の清水は今は生ぬるくなっているが、今も存在する。その水を人々が汲み取ることも今も昔も同じである。

以上のことから、イニシへは「現在との連続性において捉えられた過去」であると考えられる。また、この過去は本来、一個人の経験した範囲内について用いられたものと思われるが、個人を超えて用いられるのは、その過去が質的に同じ状態で現

在と連続する場合に限られるのではないかと思われる。神田典城氏(『万葉集十三番歌——「神代」と「古昔(いにしへ)」——(2)』(『国語国文学論集』26号 学習院女子短期大学国語国文学会 平成9年3月)は、イニシへの基本的概念を「過去へと自分の属する時空間領域を連続的に辿る意識が到達できるぎりぎりのあたり」と捉えているが、おそらく同じ考えであろう。

4—2 古今集のムカシの分析

古今集のムカシは次のような過去に対して用いられている。

- 1 自分と関わりの深い人の生前
- 2 自分の身分が変わる前
- 3 若かった頃
- 4 友人や恋人や妻と心を通わせていた頃あるいはそれ以前
- 5 遷都以前
- 6 語り伝えられた過去

ムカシは「最も古くは、なつかしい故人や自分が実際に体験・見聞した過去のことをいう」(岩波古語辞典)と指摘されているように、古今集でも右に項目立てしたうちの6の「語り伝えられた過去」に入る例を除いて、すべて自己が直接体験した過去に対して用いられている。しかし、このことはこの語に本質的に関わることではないと思われる。本質に関わることとして注目したいのは、現在との間に断絶の感じられる過去を指して言う場合に用いられていることである。それは右の1から5の場合に明確に現れている。

1 自分と関わりの深い人の生前

① 藤原忠房がむかしあひ知りて侍りける人の、身まかりける時に弔問に遣はすとて (八三七詞書)

② 主、身まかりける人の家の梅の花を見て

色も香も昔の濃さに匂へども植ゑけむ人の影ぞ恋しき

(八五一)

③ 藤原利基朝臣の、右近中将にて住み侍りける曹司の身まかりて、人も住まずなりにけるを、秋の夜更けて、ものよりまうで来けるついでに見いりければ、元ありし前裁

イニシへとムカシの違い

も、いと繁く荒れわたりたるけるを見て、早くそこに侍りければ、むかしを思ひ遣りて、よみける (八五三詞書)

④ 来む世にも早なりなむ目の前につれなき人を昔と思はむ (五二〇)

⑤ 式部卿親王、閑院五皇女に住みわたりけるを、いくばくもあらで、女皇女の身まかりける時に、かの皇女の住みける帳の帷子の紐に文を結び付けたりけるを、取りて見れば、むかしの手にて、この歌をなむ書きつれたりける (八五七詞書)

④⑤の二例は亡くなったその人を指すと考えられるが、ここに分類しておく。この意味については後に取り上げる。

2 自分の身分が変わる前

⑥ 大納言藤原国経朝臣、宰相より中納言になりける時に、染めぬ袍綾を贈るとて、よめる

色なしと人を見るらむ昔より深き心を染めてしものを

(八六九)

この項目に属する用例が少ないので八代集の中から補

足すると、「世を連れてのち白河の花を見てよめる」
散るを見て帰る心やさくら花むかしに変わるしるしなる
らん」(千載一〇六五) は在俗の頃をムカシと言う例
である。

3 若かった頃

⑦ 桜の下にて老ぬる事を嘆きて、よめる

色も香もおなじ昔にさくらめど年ふる人ぞあらたまりけ
る (五七)

⑧ 花のごと世の常ならば過ぐしてし昔は又も帰りきなまし

(九八)

⑨ 今こそあれ我も昔はをとこ山さかゆく時もありこしもの
を (八八九)

4 友人や恋人や妻と心を通わせていた頃あるいはそれ以前

⑩ 人はいさ心も知らずふるさと花ぞ昔の香にほひける

(四二)

⑪ さつき待つ花たちはなの香をかげば昔の人の袖の香ぞす

(一三九)

⑫ 人はいさ我は無き名のをしければ昔も今も知らずとを言
はむ (六三〇)

⑬ 長しとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば

(六三六)

⑭ 月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身に
して (七四七)

⑮ たれをかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに

(九〇九)

⑯ 世の中はむかしよりやは憂かりけんわが身ひとつのため
になれるか (九四八)

⑰ むかしあひ知りて侍りける人の、秋の野に遭ひて物語し
けるついでに、よめる、

秋萩の古枝にさける花見れば本の心はわすれざりけり

(二一九詞書)

⑱ 右大臣、住まずなりにければ、かのむかし遣せたりける

文どもを取り集めて、返すとて、よみて、贈りける(七

三六詞書)

⑲の「昔の人」は例えば和泉式部日記での引用では故
人であり、伊勢物語60段の引用では昔の恋人である。
今、後者としてここに入れる。

5 遷都以前

⑬ いその神ふるき宮この郭公こゑばかりこそ昔なりけれ

(一四四)

榮雅抄に「古き都のものごとに変わり果てたるに、ほととぎすの声ばかり、昔のごとくなりとよめり」とある。

右のいずれかの項目に入ると考えられるが、それを判断する材料がないものに次の一例がある。

⑭ あはれてふ言の葉ごとに置く露は昔を恋ふる涙なりけり

(九四〇)

以上の五項目二十例のムカシが指す過去には、現在との間に何らかの点において断絶があることが読み取れるものである。

3の「若かった頃」は単に過ぎ去った時といった意味にも理解できるが、⑨の例から分かるように、現在では失われた豊かな生命力があった時という意味あいが強い。⑦も既に指摘されているように「この一首は、題も心情も、白氏文集十六・桜桃花下歎白髮「遂々処花皆好。随々時貌自衰。紅桜満々眼日。白髮半々頭時」の詩情そのものである」(新古典文学大系注)といったものである。⑧もまた「花の盛りは帰るが、人の盛りは帰ら

イニシへとムカシの違い

ない」(同右)といった意味に捉えるのがよいであろう。

6 語り伝えられた過去

⑮ この歌は、むかし、仲鷹を唐土に物習はしに遣はしたりけるに、…月のいと面白くさし出でたりけるを見て、よめるとなむ語り伝ふる

(四〇六左注)

⑯ この三つの歌は、昔ありける三人の翁のよめるとなむ

(八九五左注)

⑰ この歌は、ある人、むかし、男ありける女の、男訪はずなりにければ、難波なる三津寺にまかりて、尼になりて、よみて、男に遣はせけるとなむ言へる

(九七三左注)

⑱ ある人、この歌は、昔、大和の国なりける人の女に、…それより、又他へもまからずなりにけりとなむ言ひ

伝へたる

(九九四左注)

ムカシの指す過去が自己の直接体験したものではない例は、古今集ではすべてこの「語り伝えられた過去」の項に入る。これらムカシのことがらは「…となむ語り伝ふる」「…となむ」「…となむ言へる」「…言ひ伝へたる」とあるように、すべて人から語り伝えられたものであり、話者が生きる現実の社会とは直接的には関わらないものとして扱われていると言える。その

語り伝えられた世界を流れる時間の中には話者はいない。その意味でこれらのムカシも話者の現在と断絶した過去である。

5 ムカシの持つ断絶感について

ムカシの持つ断絶感について補足できることがらをいくつか挙げれば、次のようなことがある。

ひとつは、ムカシは自然の不変と人事の転変を対照させる場合に用いられることが多いことである。例②⑦⑧⑪⑮⑳がその例であるが、古今集以外にも、

花の色は昔ながらに見し人の心のみこそうつろひにけれ

(後撰一〇二)

つれづれと荒れたる宿をながむれば月ばかりこそむかしなりけれ

(詞花三〇八)

ささ浪や志賀の都は荒れにしをむかしながらの山桜かな

(千載六八)

もろともに見し人いかになりにけん月は昔にかはらざりけり

(千載九九五)

宿もやど花もむかしに匂へども主なき色はさびしかりけり

(千載一〇五四)

むかし見し松の梢はそれながらむぐらの門を鎖してけるかな

(千載一一〇二)

などで見られる。イニシへはこのように自然の不変と人事の転変を対照させる場合に用いられることはない。ただし、

いつともかはらぬ秋の月みればたゞいにしへの空ぞ恋しき

(後拾遺八五三)

いにしへに変はらざりけり山ざくら花は我をばいかゞ見るらむ

(千載一〇五五)

といった例が八代集の中にはわずかなが見られる。しかし、ムカシの場合は、過去は現在とは断絶した時間として客観的あるいは対照的に捉えられているのに対し、これらの歌における過去は、現在の自分が恋うる対象であり、また、現在のわが身を感傷する基準である。すなわち現在と関わりにおいて捉えられている過去である。

もうひとつは、ムカシが故人その人を意味することである。

例④⑤がその例であるが、八代集では他に、

むかしだにむかしと思ひしたらちねのなほ恋しきぞはかなかりける

(新古今一八一五)

の例が見られる。この意味は「自分と関わりの深い人の亡くな

る前」の項目に入れたように、その人の生前の時をいうことから派生したものであろう。人の死が一つの時代の終わりを意味することがあるが、生前の時の意味にも故人の意味にも理解できる例は多い。例③もそうであるが、

思ひやれむなしきとこそうちはらひむかしをしのお袖の雫を
(千載五七四)

けふくれどあやめもしらぬ袂かなむかしをこふるねのみ
かゝりて
(新古今七七〇)

あやめ草ひきたがへたる袂にはむかしをこふるねぞかゝり
ける
(新古今七七二)

なども同様である。

イニシへにも故人を意味する例がある。管見では次の一例だけである。

…(中君は)「いにしへ(故大君)の御かはり」と、(薫を)
ならずへ聞こえて
(源氏物語・早蕨)

しかし、これは単にこの世から過ぎ去ってしまった人という意味あいである。同じ早蕨の巻に、「過ぎにし(故大君)が恋しきことも忘れねど」ともあり、「あひ見し妹はいや年ざかる」(萬葉二二一)といった捉え方から派生したものと思われる。

イニシへとムカシの違い

さらに仏教の前世の意味のムカシがある。これは故人の意味から派生したと考えられるが(望月郁子「イニシへ・ムカシ考」)、次に掲げる例が示しているように、「この世」に対する「むかしの世」という意識が濃いようである。

昔の契有りけるによりなん此世界にはまうできたりける
(竹取物語)

むかしの世にいかなる罪をつくり侍りて、かうさまたげさ
せ給ふ身となり侍りけん
(かげろふ日記・下)

いかさまに昔むすべる契りにてこの世にかかる中のへだて
ぞ
(源氏物語・紅葉賀)

これもさるべきむかしの世のちぎりなり。
(夜の寝覚)

うきも猶昔のゆゑと思はずばいかに此の世も恨みはてまし
(新古今一九六六)

イニシへには前世の意味は見当たらないようである。ただし、イニシカタに「御足跡を 見に来る人の 伊尔志加多 千代の罪さへ 滅ぶとぞいふ」(仏足石歌) という例があるが、ここには「前世・現世・来世」といった世界の違いは意識されていないものと思われる。

まとめ

以上見てきたように、イニシへとムカシには、次のような違いがある。

イニシへは現在との連続性において捉えられた過去であり、ムカシは現在と断絶している過去である。

この違いは、イニシへは「経験の時間」における過去を表す語であり、ムカシは「思索の時間」における過去を表す語であるということと、次のように関わるものと考えられる。

前述のように、その語源から考えて、イニシへが「経験の時間」における過去を意味することは疑えない。「経験の時間」には、話者の歩みの経験として捉えられるものと、話者は動かずに出来事が目の前に次々と立ち現れると捉える場合に認識できるものとが区別されたが、いずれの場合においても、過去は単に「過ぎ去っていった時」ではない。そこには過去から現在へ、また現在から過去へと連続して流れる時間が感じられているだけであり、現在と過去を断絶させる意識はない。したがって、イニシへは「経験の時間」における過去であり、現在との連続性において捉えられた過去であるということになるの

である。

「ムカシは現在と断絶している過去である」といった場合、断絶しているのは時間ではない。かつての自分をとりまく状況が現在のそれと断絶しているのである。そのきっかけになったのは主に人事の変化であるが、その変化を断絶と意識しているのは話者である。したがって、同じ人事の変化を断絶と意識しない人にとっては、その変化以前はムカシではない。したがって、ムカシが「思索の時間」における過去であり、その過去は現在と断絶している過去であるということになるのである。

おわりに

本稿で扱うべくして扱い得なかったムカシへという語がある。ムカシはムカシへの下略と考える説もあるが、八代集では古今集に次の二例が見え、

○むかしへやいまも恋しき時鳥ふるさとしも鳴きて来つらむ (一六三 忠実)

○あはれむかしへ ありきてふ 人麻呂こそは うれしけれ (一〇〇三 忠実)

土佐日記にムカシへヒトの形で亡くなった娘を指す例が二例あ

るのみである。上代には仮名書き例はない。ただし、萬葉集の「古家」(9・一七九八、11・二六二八、11・二六一四)、「古部」(7・三七九一、16・三七九一)をそのように訓む可能性も否定できない(望月前掲論文)。

また、本稿で十分に考え得なかつたことがある。八代集の詞書・左注にはムカシが多く用いられるが、イニシヘが用いられることは極めて少ないということについてである。古今集の仮名序ではイニシヘが用いられることが多く、和歌ではムカシが用いられることが多いのは、仮名序では過去との連続性が強調され、和歌では過去との断絶を詠嘆することが多いことによるものと考えられたが、詞書・左注にムカシが多く現れるのは、主となる和歌と同様の立場で過去が捉えられていることを示唆するのではないかと思われる。ただし、そのように考えることの反例になると思われる例がある。詞書にはムカシと表現されている過去を、和歌ではイニシヘと言った、後拾遺集に見える

次の二例である。

○熊野に詣で侍りけるに、小一条院の通ひたまひける難波といふ所に泊りて、むかしを思ひいでてよめる

いにしへになにはのことも変はらねど涙のかかる旅はなかりき (五九五)

○入道前太政大臣法成寺にて念仏行ひ侍りける頃、後夜の時に逢はんとて近き所に宿りて侍りけるに、鶏の鳴き侍りければ、むかしを思ひいでてよみ侍りける

いにしへはつらく聞えし鳥の音のうれしきさへぞ物はかなしき (一〇一九)

これらは例外的なものと考えるか、あるいは和歌の世界と詞書との世界はやはり別であると考えるべきか、ということになるが、叙事の世界と抒情の世界における過去の捉え方に関わって、改めて考えるべき問題であるように思われる。